
手の中

枝豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手の中

【Nコード】
N4828A

【作者名】
枝豆

【あらすじ】
もし、あなたの彼氏を好きだと思ったら怒りますか？好きな人に最後の言葉を伝えました。

もし、もしも、あなたの彼氏を好きだといったら、怒りますか？？

私には好きな人がいます。

小さいときから大好きな彼。

告白をしようと思った。でも、今までの「幼馴染」を壊したくなくて、

他の言い寄ってきたへらへらした男たちと遊んでいた。

彼は、「そんなやつらと一緒にいるなよ！！」といった。

「なら、君が朝まで一緒にいてくれる？？」

冗談のつもりだった。もちろん、彼が迎えに来てくれたのにこんな奴等と一緒にいる意味なんてない。

一瞬戸惑った彼だが、

「いいよ、別に。お前の家親いないもんな。」

そういつて、彼は私に手を差し出してくる。私はその手をしっかりと握り締めて、立ち上がる。

私の両親は、父親・教師 母親・看護師

どちらも、公務員である。

私は、小さいときから一人でよく留守番をしていた。そこには、よく彼も一緒だった。

彼の両親は離婚していて、家には母親しかない。

彼の母も、看護師だ。

私の母と彼の母は、同じ病院に勤めていて、家も近い。なので、よく一緒に留守番をさせられた。

そのころの私は、男の子と女の子の違いなんて何もないと思うほど子供だった。

実際、4・5歳だから子供なのだが。

そのころから彼は、優しくかった。今と同じように、いつもは無口なのに、時々見せる笑顔や差し出される手は、温かかった。その手をしっかりと握り締め、私は立ち上がる。

私は、その手があったから立ち上がった。立ち上がった後の彼の笑顔がまたなぜか嬉しくなった。

それから、約十年。男の子と女の子の違いを知らなかった私は、遠い昔の話である。

精神的にも肉体的にも、根本的にも、全てが違ふことにこの十年で嫌でも気付かされた。

私に、彼氏ができた。とてもいい人だ。優しいし、それなりにかっこいい。頭もそれほど悪くなく、スポーツも他の男子に比べてできる。こんな人に告白された私はどんなに幸せ者だろう。でも、「彼氏のこと好き??」と聞かれると、言葉を濁してしまう。

あの彼にもいつの間にか彼女ができていた。美人とはいえないが、彼は彼女とうまくやってるようだ。

彼に彼女ができてから、私は彼と話ができなくなっていた。彼が彼女といると、思わず顔を背けてしまう。

私は、そのたびに感じる。いや、ずっと前から気付いていた。

私はまだ彼のことが好きなのだ。小さいときに感じた、あやふやなものではなく、はっきりとした気持ち。

小さいころ。私が男女の違いを知らなかったころ。

私に向けて、私だけに向けて差し出されたあの温かい手のなかに、今は違う人の手がある。

恋人同士が手をつなぐのは当たり前のこと。私たちもつないでいる。

でも、私はどうしても彼たちのほうを見れなかった。特に登下校のときは。

いつも、二人仲よさそうに手をつないで笑顔を浮かべながら。

私は、その光景を見るたび泣きたくなった。

「もう、もうあのころには戻れない。。。。」

私は、昔に戻りたかった。あのころに。彼の手のなかに私の手があったところに。

数カ月後。私は彼と別れた。

彼を忘れられなかったから。彼とやり直したかったから。

私は学校の帰り彼に会いたいと思った。
私の足は彼の家へと向けて歩いていた。

彼の家に近づくとなんだか周りが騒がしい。やけに顔の青い人がおおい。
黒い服を着た人達がほとんどだ。

私は、嫌な予感がした。足が次第に速くなり、いつの間にか走り出していた。
家が近いため、5分も経たずに家の前へとついた。彼の彼女もいた。
彼女は無表情で立ち尽くしていた。

「おばさん、要は??」

「あ、夏輝ちゃん今連絡しようとしていたところなのよ。要が大型ダンプに轢かれて」

そこから先の意識はない。ただ泣いた。泣いて泣いて泣きまくった。

私は、心に決めた。もう好きな人を失うのは嫌だ。
「幼馴染の関係のままで。」と考える自分も嫌だ。
彼女がいようと関係ない。もう自分の気持ちさえも伝えず、好きな人を手放すことはできない。

要、君にはちょっと遅かったね。でも、君の手とっても温かった。
今はもう冷たいけど。

大好きでした。君の手があったから、私は今ここにいると言っても
おかしくないよ。

本当は、目の前で言いたかったよ。

今までありがとう。 大好きでした。

これが、私が要に告げる最初で最後の言葉。

ありがとう。 大好きでした。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

前の、短編と終わり方がかぶってしまいました。

今回は目を瞑ってあげてください。お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4828a/>

手の中

2011年1月20日02時55分発行